昭和49年10月22日国鉄首都特別扱承認新聞紙第295号

週刊

うたごえ新聞

3／1
<月曜日>
NO. 598（1976年）

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
発行 東京都新宿区西大久保3－60
☎03（209）0638～9 うたごえ新聞社
振替口座 東京2－5631 昭和34年1月31日
第三種郵便物認可 毎週月曜日発行
1部60円（〒15円）・月250円（〒75円）

2面
全国総会（3/1～2/28）開催

キラパジュン来日
感想2
4面

この胸に迫る歌声

感想1

いまペンを握っている。握っているが書けない。あの胸の高なりを、澄んだ歌声を、どう表わしたらいいのか、ペンはすすまない。

私は、来日三日目に行なわれた「キラパジュン歓迎青年集会」に参加していた。

チリ人民支援、民主チリの使者、ファシストを告発するアンサンブル――百も承知していたことを、私は一もわかっていなかったことを反省している、いま。

◇ ◇ ◇

ヘゾォリィ インテルナショナレ ゾリ ダリテート
エル プェブロ ウニド
ハマセラ ベンシドゥ

音のない叫び声、デモンストレーションのときの叫び声から始まる「アジェンデとともに」（「不屈の民」と同じ）は

ヘマゼランの海風は
草原の風こえ
アジェンデとともに行く

とかわった。ほんとうに、風が渡るようなメロディーと、その前の叫び声が対比されて、彼らの歌は、「歌」を越えて聞こえてくる。

ああ、なんという歌声だろうか。けして、大げさな誇張をするでもないのに、その歌声は、ピリッピリッと胸にささってくる。

これがチリか、これが軍事ファシストを告発する使者か、ビクトル・ハラの心をとはこれだったのか、私は百も承知していたつもりなのに。

サンポーニャ（長さの違う細い竹を横に何本か結んだ、笛の一種）を吹くリーダーのカラスコとラゴスの二人、息をふきかけたそのままの音は、素朴な、低くかすれた響きで、彼らの歌とまったく同居している。

若いガルシアのソロは「耕やす者への祈り」――ああ、この歌声は、あのメルセデスソーサと同じだ。あのときの、胸がつまるような気持を、いま、また私は目の前で聞いている。

キラパジュンがやってきた。私たちが想像しているそれよりも、はるかに感動的な彼らが、いまこの国に来ている。

その歌声は、「音楽に政治はない」という人をも巻き込んできっと、かならず、あなたの心を揺さぶるに違いない。

もっと言葉がほしい、音楽を文章で表わす言葉がほしい、キラパジュンの歌声を伝えられる言葉がほしい。（未）

感想2

「チリの新しいうた運動」の真髄を聴いた。

ヨーロッパ各国はもちろんのこと、世界各国への演奏旅行で絶賛を博し、数かずの賞を受けているキラパジュン。

彼らのうたには、言葉の壁をのりこえて、聴く者のこころに直接うったえるものがあった。

哀しゅうのあるケーナのひびきに、サンポーニャの音色に、まだ見ぬチリの風景がうかぶ。

黒い衣に身を包んだ、七人のヒゲ男のうたごえは、時には、哀しゅうをおび、チリに残した安否もわからぬ肉親を思うかのように切せつと呼びかける。力強い合唱は、ピノチェット軍事政権のもと、いまも闘っているチリ人民を代表し、ファシズムへの怒りをたぎらせてひびく。

歌のあいだには、かわるがわるあいさつに立つ。歌の背景を、ユーモアを交えて、そしてチリの民族楽器を、聴衆にわかりやすく説明する。

親しみのある話しに、すばらしいうたごえに、会場は、いやがうえにも引き込まれてゆく。「ティオ・カイマン」（ワニの小父さん）「ラ・バテーア」（洗濯桶）などには、会場もともにうたった。アメリカ帝国主義への風刺をこめて、力一杯「ティオ・カイマン」と。

「『真実の革命家は決して死ぬことはない』これは、私たちの友人であるビクトルの言葉です。私たちは今、この言葉をビクトルにささげて歌います」。

ビクトル・ハラ作による「魂は旗にみたされて」に、彼らは、こうあいさつした。静かに、そして、力強く……。

――兄弟なる友よ、きみは眠ってはいない きみの心は春のきざしを聞いている……
そこできみは顔を日に向けて
埋められ 新しい土が種子となった君を隠す 根は深く地中に沈み やがて生まれてくることだろう……

二月十八日。日本公演初日の静岡・駿府会館は、おりからの雨にもかかわらず、千五百名の聴衆でうまっていた。

「ベンセレーモス、我われは勝利する」、会場を圧するうたごえがひびく、地球の裏側までもとどけと。いつまでも、いつまでも、連帯の拍手は、なりやまなかった。＝静岡にて（法）

ふめんだい

銀座のMデパート裏に中・高校生の人山。と一台の車が出てきて、中高生たちはスターを追いかけた。車道に飛び出し、信号を無視して車を追うのは、みんな女学生ということに気がつく

◇ ◇ ◇

二月のある午後、羽田空港に七人の使者が到着。とりまく若者の間から「アジェンデとともに」の合唱。「来日した折の、あの空港の歌声が忘れられない」と七人のキラパジュン。

◇ ◇ ◇

テレビ番組「スター誕生」に、一日六千通の申し込みがある。一夜にして注目の的となるを夢みる若者の多さ。有名人の所属事務所前は今日も人の山。

◇ ◇ ◇

四十三人の生徒に、一人残らず音楽の楽しさを教えたい、それを追う「先生、子どもの二重唱」。記者と文通を始めようという生徒も現われた。

◇ ◇ ◇

音楽に憑(つ)かれた人びと。「運動」には対象が無限にあることを知る。（未）

―ニュース・ポイント―

音楽会評／若者に店を開放する経営者／吉田美奈子C 2面
うたは闘いとともに／マスコミ／高橋アキR 3面
日本のうたごえ全国総会案内
声のよくなるお話／林学創作裏話／あなたも名作曲家 4・5面
〈特別取材〉30キャンペーン
北海道のうたごえ編
全国総会への提言／1年8組物語
スポット76／なかまの詩／不楽ッ人／クイズ 6面
走馬燈＝長野・京都・福岡・大阪／映画音楽の45年 7面
親子音楽会「この指とまれ」
紹介・創作曲「父ちゃん今日もしっかりね」「奇蹟の風」 8面